59

第一次大戦の航空医学

黒澤嘉幸

一九一四年八月三日ドイツはフランスに宣戦布告を行うと共に、四十四個の現役歩兵師団を主体とする大軍をフランスに進攻させた。

一方、フランスは四十六個の現役歩兵師団を主力とする軍隊を配備して、ドイツ軍の進攻に備えたのである。

戦況は一時ドイツ軍に傾き、ドイツ軍の右翼はマルヌ河をこえてパリに迫り、フランス政府は九月二日首都をパリからボルドーに移転する計画を発表した程であった。しかしフランス軍は敢闘し、遂にドイツ軍は後退を余儀なくされたのである。

その後、全線にわたって激しい攻防戦が行われたが、両軍の動きは次第に鈍くなり、遂に一九一四年十一月以降、フランス、スイス国境からベルフォール、ナンシー、ベルダン、ランス、サンカンタン、アラスを経て北海沿岸のニューポールにいたる約八百粁の長さにわたって、夫々陣地を構築して相対するようになった。

その後、両軍は互いに攻撃を繰り返すが、相手陣地を突破することが出来ず、一九一八年九月ドイツ経済が崩壊するまで、この態勢が続いたのである。

このような戦況にいたった原因について、後世の史家は次のように分析している。

「この戦争で重要な役割を果たしたのは航空機と自動車であった。航空機は敵陣地の奥深くまで絶え間なく偵察を行い、敵情を的確に把握し、指揮官に報告したので、暗夜の奇襲も奇襲にならず、白昼公然と彼我の実力を敵前に暴露しての戦争になった。このため、敵の陣地を突破するのがきわめて難しくなったのである。

また、敵の意図がわかると、数万台の自動車を用いて援軍を敵の攻撃目標の付近に集中させたので、殊更敵も攻撃を成功させることが出来なくなったのである。

第一次大戦が始まったとき、フランス軍の第一線機は百三十八機、イギリス軍は六十三機、ドイツ軍は百八十機であった。

飛行中隊当初の任務は航空偵察（写真撮影を含む）と友軍砲兵の弾着観測であった。

航空偵察は騎兵の偵察と異なり、敵軍の後方深くまで飛行、偵察を行ったので、敵の軍又は軍団レベルの攻撃の兆候を察知することが出来、味方に大きな利益を与えたので、その業務はきわめて多忙となった。この様な状態のため、飛行機の需要は益々たかまり、一九一八年十月の時点では仏軍保有機は六千機に、英軍は三千五百機にふくれあがったのである。

一方、敵の偵察機を駆逐し、制空権を確保しようとして駆逐機が開発された。

その代表的なものがドイツのフォッカー戦闘機であった。回転するプロペラの間から機関銃を発射できる同調装置を備えて攻撃力を向上させたほか、エンジン出力を増加することにより、急上昇、反転などの運動を可能にし、航空戦術の幕開けとなった。しかし、そのことは搭乗するパイロットの生理に大きな負担がかかるようになったのである。

第一次大戦後、航空指導のため、フランスから来日した仏国航空団の団長フォール大佐は第一次世界大戦におけるパイロットの損失補充について毎月十六％であったと述べている。

この損耗にたいして、戦時中も色々の対策がとられた。そのうち、航空医学の範囲に入るものは次のとおりである。

一　操縦者選択法の改正
二　航空神経症（航空疲労）の対策
三　飛行軍医の養成
四　飛行保護装置